

登録コード	L1831300	開講年度	2026				
担当教員	新津 健一郎			副担当			
授業科目	東洋史基幹演習						
英文授業名	Asian History: Basic Seminar						
授業タイトル	東洋史学研究文献講読						
単位数	2	対象学生		講義期間	前期	曜日・時限	木曜・4時限
講義室	人文501演習室		遠隔授業科目		読替科目	読替科目は履修案内を確認すること	
信大コンピテンシー	該当						
授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」要素				【授業の達成目標】		
	2026Lカリ, 2025Lカリ, 2024Lカリ						
	【2023年度以降加付対象】人文学部人文学科の学士（文学）の称号にふさわしい基礎学力と専門的学力が身についている。 【思索力・受容力・批判力】				歴史学（東洋史学）にかかわる研究テーマについて、先行研究のサーベイを行い、学説上重要な文献を絞り込むとともに、当該文献を分析的に読解・批評し、口頭報告及び体裁の整った文章という形で表現することができるようになる。 また、自身の見解を的確に他者に伝え、あるいは他者の見解を適切に受け止め、建設的に議論することができるようになる。		
授業で学べる「テーマ」	芸術文化、多文化協働						
全学横断特別教育プログラム							
授業の概要	・歴史学コースで学ぶ上で、「先行研究の取り扱い」は必須の技能です。本授業では、毎回テーマを設け、「研究史を体系的に把握し、その中で鍵となる論著を選び出し、実際にそれを手に入れて読み込み、批評する」という一連の作業を実践しながら身につけていきます。 ・授業は演習（ゼミ）形式をとります。すべての受講者は、学期中に一回、上記の作業に取り組むことになります。具体的には、まず、ガイダンスの際に担当の回とテーマの割り振り（第3回から第13回までのいずれか）を行い、それぞれ担当テーマに即して批評対象図書（和書）を選定します。その際には、選定図書について教員に確認を受けることとします。そのうえで、当該図書についてガイダンスでの指示に沿って準備を進め、担当として割り当てられた回に、批評の内容を文章形式のレジュメにまとめて持参し、文章読み上げスタイルの報告と質疑応答を行います。資料の具体的な体裁や盛り込むべき事項の詳細は、ガイダンスで説明します。また学期末には、報告レジュメを基礎に、質疑応答の内容や教員からの指摘を反映した「書評」を執筆して提出するものとします。						
授業計画	第01回 ガイダンス（参加者自己紹介、受講ルール等の説明、担当の希望調査と仮決め） 第02回 基本事項に関する講義、担当確定 第03回 報告（01）中国秦漢史 第04回 報告（02）中国隋唐史 第05回 報告（03）中国宋元史 第06回 報告（04）中国明清史 第07回 報告（05）韓国朝鮮近現代史 第08回 報告（06）中国近現代史 第09回 中間まとめと教員からのフィードバック（講義） 第10回 報告（07）東西交渉史（古代・中世） 第11回 報告（08）中央ユーラシア古代・中世史 第12回 報告（09）中央ユーラシア近世・近代史 第13回 報告（10）東アジア近現代史 第14回 書評の執筆に関する講義 第15回 まとめ（総括、授業アンケート、書評の提出に関する連絡など） 参加者数は東洋史学研究室の所属学生数・進級者数などをもとに想定したものです。他の分野／コースからの参加も可能です。実際の参加者に応じて、授業の目標を損なわない範囲で計画の組み換えやテーマの入れ替えを行います（各回のテーマも同様）。また、参加者の報告を軸に授業を進行するため、実際の状況に応じて内容は多少前後する可能性があります。時間が不足する場合は、質疑応答の一部をeALPSで行うなどの対応をとる可能性もあります。						
成績評価の方法	・担当回の報告（40％）、学期末に提出する書評（40％）、報告担当回以外の発言（20％）に基づき、総合的に成績評価をおこないます。 ・「報告」は、担当回での口頭報告を指します。当日までの準備を前提として、資料（レジュメ）の形式、内容理解・批評の妥当さ、質問等への対応の的確さを確認します。 ・「書評」は、報告内容について、当日の質疑応答や指摘をもとに学期末に作成するものとします。内容のほか、体裁も評価の対象とします（下記「基準」参照）。なお、発表をせずに、書評だけ提出することは認めません。 ・報告担当回以外の発言については、各回の報告担当者が提示した情報に即した発言（指摘・質問等）ができているかを確認します。						
成績評価の基準	1) 所定のテーマに沿って研究史を体系的に把握し、研究史的意義を持つ論著を選定・入手して批評することができていれば、「合格水準にある」といえる。 2) 上記1)に加えて、批評の結果を指定の方法に沿って報告し、質問や指摘に対して適切な応答ができていれば、「やや上にある」といえる。						

成績評価の基準	3) 上記1)・2)に加えて、質問や指摘を受けた事項をもとに、体裁の整った書評を作成することができていれば、「かなり上にある」といえる。 4) 上記1)・2)・3)に加えて、他者の報告について、内容に即し、かつ建設的な質問やコメントができていれば、「卓越している」といえる。
事前事後学習の内容	事前学習 ・自身の報告担当回に向けて、丁寧に発表準備を行ってください（自身で計画をたてて、相応の時間をかけて準備を進める必要があります）。具体的な必要事項と資料作成の要領はガイダンスで説明します。 ・自身が報告者ではない回についても、的確かつ建設的な質疑応答ができるよう、概説書などを用いて関連事項を確認したうえで授業に参加してください。なお、各回の報告者が選定した図書の書誌情報は、確定次第共有します。 事後学習 ・報告者は、授業後に「書評」を作成してください。授業中の指摘や質問は必ずメモしておき、極力すべて反映してください。 ・報告者以外の参加者は、報告者が取り上げた論点や批評の着眼点、質疑応答で問題となった点について整理しておいてください。授業後、それらを吟味し、自身の報告準備あるいは書評の執筆に反映してください。 ・準備、授業中、復習の全般にわたり、手間を惜しむことなく、意欲的に取り組むことが必要です。相応の時間と労力を要しますが、卒業論文の作成に向けては、自身の関心や問題意識を踏まえて主体的に探究活動を展開する能力の涵養が不可欠です。事前事後学習の指定事項についても、単なる作業として機械的に消化するのではなく、積極的、自発的、能動的に活動することを期待します。
履修上の注意	・文献の収集には、図書館を活用してください。計画的に時間をやりくりするとともに、手と足を動かして丁寧に準備してください。粘り強く、徹底的に情報を集めることが大切です。わからないことは放置せず、必ず質問してください。図書館に所蔵されていない文献の入手については、以下のURLを確認してください。 → https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/matsumoto/use/from-other-libraries.html ・国立国会図書館デジタルコレクション（無料、要事前登録）は、学修・研究にたいへん有用なツールであるので、国会図書館の個人利用登録（本登録）を済ませておくことを強く推奨します。また、授業にはデジタルデバイスを持参してください。 ・履修希望者は必ず初回の授業に参加してください。発表担当者の割り当てを組む必要があるため、履修を希望するにもかかわらず急病等によりやむを得ず初回授業を欠席する場合は、当日中（遅くとも翌日中）を目途に、担当教員までメールで確実に連絡してください。 ・コース内の他研究室／他コースからの参加も可能です。ただし、人数把握が必要であるため、初回授業に必ず参加するとともに、真にやむを得ない事情により初回に参加できない場合は教員まで確実に連絡してください。 ・報告担当者の欠席は厳禁とします。スケジュール管理や健康管理等に十分留意してください。ただし、真にやむを得ない事情（「授業の出席に関する要項」に定める学修の補充の対象とする事由など。たんなる準備不足によるスケジュール変更は不可）によるものであれば、代替の機会を設けます。また、報告をもとに議論することも重要な活動であるため、担当者でない場合でも無断欠席は認めません。 ・学期中、eALPSまたは大学のメールアドレスで通知を行うことがあります。週1回以上を目安に定期的に確認してください。
質問、相談への対応	・対面での対応は原則として授業の前後に受けることとします。研究室所属者は、研究室内の連絡ツールを使用してもかまいません。 ・電子メール（アドレスはeALPSまたは学部履修案内を参照）での質問・相談にも対応しますが、返信には時間を要する場合がありますので、余裕をもって問い合わせてください。 ・個別に面談を希望する場合は、まず電子メールで問い合わせてください（対面・遠隔のいずれでも対応可）。
教科書	指定しない。
参考書	・『アジア歴史辞典』平凡社、1959-62年。 ・島田虔次ほか編『アジア歴史研究入門』同朋舎、1983-87年。 ・山根幸夫編『中国史研究入門（上・下）』増補版、山川出版社、1991・95年。 ・山田利明『中国学の歩み 二十世紀のシノロジー』大修館書店、1999年。 ・堀敏一『中国通史：問題史としてみる』講談社学術文庫、2000年。 ・礪波護ほか『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会、2006年。 ・桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年。 ・小杉泰ほか編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、2008年。 ・大津透編『律令制研究入門』名著刊行会、2011年。 ・朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』名古屋大学出版会、2011年。 ・岡本隆司、吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』東京大学出版会、2012年。 ・水島司ほか編『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年。 ・村井章介編集代表『日明関係史研究入門』勉誠出版、2015年。 ・津田資久、井ノ口哲也『教養の中国史』ミネルヴァ書房、2018年。 ・佐藤昇編『歴史の見方・考え方』山川出版社、2018年。 ・小松久男ほか編『中央ユーラシア研究入門』山川出版社、2018年。 ・小浜正子ほか編『中国ジェンダー史研究入門』京大学術出版会、2018年。 ・岡本隆司、箱田恵子『ハンドブック近代中国外交史』ミネルヴァ書房、2019年。 ・朝日新聞出版編著、岡本隆司監修『年代順だからきちんとわかる中国史』河出書房新社、2020年。

参考書	・岡本隆司監修『一冊でわかる中国史』河出書房新社、2020年。 ・金澤周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房、2020年。 ・田中仁ほか『新・図説 中国近現代史』改訂版、法律文化社、2020年。 ・鈴木董ほか編『中東・オリエント文化事典』丸善、2020年。 ・漢字文献情報処理研究会『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』好文出版、2021年。 ・岩城卓二ほか編『論点・日本史学』ミネルヴァ書房、2022年。 ・吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学』ミネルヴァ書房、2022年。 ・川島真編『ようこそ中華世界へ』昭和堂、2022年。 ・山下清海『華僑・華人を知るための52章』明石書店、2023年。 ・中西竜也、増田知之編著『よくわかる中国史』ミネルヴァ書房、2023年。 ・山口みどりほか編『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房、2023年。 ・佐藤昇編『歴史の見方・考え方 2』山川出版社、2023年。 ・小松久男編集代表『中央ユーラシア文化事典』丸善、2023年。 ・辞典編集委員会『イスラーム文化事典』丸善、2023年。 ・山本英史『中国の歴史』増補版、河出書房新社、2024年。 ・河合洋尚ほか『中国民族誌学』風響社、2024年。 ・大学の歴史教育を考える会『わかる・身につく歴史学の学び方』大月書店、2025年。 世界各国史、世界歴史大系、講座世界歴史、「興亡の世界史」、「歴史の転換期」、中公文庫「世界の歴史」などの講座／シリーズについては、中央図書館3階書架で確認してください。中央図書館2階参考図書も積極的に利用してください。 批評の対象として選定した図書が中央図書館・資料室に所蔵されていない（または貸出中となっている）場合は、自治体図書館の利用や取り寄せ（ILL）によって入手してください。 その他、ガイダンス及び授業の中で随時紹介します。
-----	---